

# 旧下野煉化製造会社煉瓦窯

栃木県下都賀郡野木町

高さ30mほどの見事なメタセコイアがきれいに紅葉し、秋の陽射しに輝いていた。栃木県野木町の「旧下野煉化製造会社煉瓦窯（通称・野木町煉瓦窯）」は、このメタセコイア並木の直ぐ側に建つ。並木の紅葉は建物とハーモニーを奏できるようにレンガ色だ。1890（明治23）年から1971（昭和46）年まで約80年にわたって大量の赤煉瓦を製造し、工場や鉄道建設などに供給、日本の近代化の一翼を担ってきた。今は国の重要文化財（1979年指定）、近代化産業遺産群（2007年選定）として一般に公開されている。

煉瓦焼成窯は、当時最新鋭の「ホフマン式輪窯」を導入。ホフマン窯は、ドイツ人のフリードリヒ＝ホフマンが19世紀半ばに特許を取得した輪窯で、時計回りに空気の流れをつくり、そこに火が循環して煉瓦を焼成する仕組みだ。16区画に分けられた窯を順次循環移動しながら窯詰め、予熱、焼成、窯出しを繰り返し、連続的に赤煉瓦を焼くことで大量生産に対応。野木町煉瓦窯の年間生産量は約250万～300万個に達したという。ホフマン窯はピーク時に全国で50基以上あったとされているが、現存するのは4基で、うちほぼ原型をとどめているのは野木町煉瓦窯だけ。煉瓦及び木造で、窯の数と同じ16角形の外観と真ん中にそびえる高さ約34mの煙突が目を引く建物だ。

明治20年代は政府の殖産興業策によって、全国に鉄道、紡績、繊維などの企業設立が相次ぎ、現在のベンチャーブームのような時代だった。下野煉化製造会社はそうした活況を呈す世の中に、建設資材としての赤煉瓦を供給し続けた。当時の詳しい資料は残っていないが、24時間交代制で作業に従事していたとみられ、言わば「不夜城」のようなエネルギーがあふれていたに違いない。



窯内部の様子。焼成室は全16室あり、通常1室で約14,000個、全室で約22万個の煉瓦が焼成可能。製造された赤煉瓦は、北関東を中心に、東京へも出荷された（提供：野木町役場教育委員会）

